

大学文書館における展示活動 ー常設展「京都大学の歴史」を中心にー

西山 伸†

はじめに

大学文書館では、これまで4種類の展示を企画・実行してきた。各展示の名称および開催期間は以下のとおりである。

- ① 「三高展」(2003年2月11日～2004年1月31日)
- ② 常設展「京都大学の歴史」(2003年12月15日～)
- ③ 企画展「創立期の京都大学 ー初代総長木下広次を中心にー」(2004年6月1日～6月30日)
- ④ テーマ展「時計台の昔と今」(2004年8月12日～)

1年半ほどの間に規模の大きい常設展を含めて4回開催したというのは、「大学アーカイヴズ」としては比較的頻繁に展示を行っているといえるだろう。

ところで、「大学アーカイヴズ」の活動の一つとして、展示は重要な位置を占めているのが現実である。2003年に全国大学史資料協議会東日本部会が行った「大学アーカイヴズに関するアンケート」においてもその傾向は見ることができる⁽¹⁾。にもかかわらず、従来「大学アーカイヴズ」における展示について正面から論じられることはほとんどなかったといってよい。折田悦郎が指摘するよう

に「これからの大学アーカイブにとって展示（機能）をどう考えるのか、あるいはどのように展開するかは研究課題の一つであり、また大きな可能性を秘めたテーマでもある」⁽²⁾のであれば、事例研究の積み重ねおよび理念的な研究は不可欠なものとなろう⁽³⁾。

以上のような状況を踏まえて、本稿では、大学文書館がこれまで行ってきた展示活動を紹介するが、特にそのなかでも最も大きな事業であった常設展「京都大学の歴史」について述べることにする。

1 製作に至るまで

1997（平成9）年に創立百周年を迎えた京都大学では、その数年前から各種の記念事業について議論が重ねられ、1994年6月に最終決定に至った。記念事業の一つとしてあげられたのが従来京大のシンボリック役割を果たしてきた本部本館（通称時計台）を改築し、百周年時計台記念館（以下「時計台記念館」と表記する）とするというものであった⁽⁴⁾。そこでは、時計台記念館は「異分野学問領域の間のみでなく大学と社会の学術的な交流のためのインターフェイスとなるような施設を設けることを計画してい」と記されている。

時計台記念館建設が決定した当初から、内部に

† 京都大学大学文書館助教授

大学の歴史を展示するスペースを設けるという計画が存在していた⁽⁵⁾。当時同じ百周年記念事業として『京都大学百年史』の編集も進められており、その成果も生かしながら歴史展示を行うことが考えられていたといえよう。

時計台記念館は2001年9月に着工された。展示については、長尾真総長より百年史関係の諸資料を引き継いだ大学文書館(2000年11月設置)に製作を行うよう要請があり、当館が担当することになった。

製作にあたる体制としては、大学文書館の専任教官(3名)が現場の製作チームとして企画立案、原稿作成、業者との作業等にあたることとし、大学文書館における業務を議論する場である教官会議(月1回程度開催)で館長・教授(併任)も含めて検討を加え、必要に応じて総長に報告を行っていくというものであった。

大学文書館の内部で展示について本格的な議論を開始したのは2002年5月であった。だが、その後予算配分や展示業者の決定⁽⁶⁾まで時間がかかり、実際の作業を開始したのは2003年6月になってからであった。展示の開始時期については、大学文書館では当初時計台記念館において閲覧業務を開始する2004年4月を念頭に置いていたが、時計台記念館の竣工記念式典(2003年12月13日)にはオープンしている必要があるということで、実際の作業開始の段階で急遽12月に繰り上げられることになった。

2 施設

前述のような目的で建設された時計台記念館には、歴史展示室および大学文書館の諸施設のほかに、国際・国内学

会、講演会・シンポジウム等を行う百周年記念ホール(500名収容)、式典・レセプション・会議・学会分科会等を行う国際交流ホール(300名収容)、迎賓室、会議室などが設けられ、さらにレストラン、サロン、生協ショップも配置された。このように時計台記念館は、学会・講演会等によって京大関係者や国内外の研究者が集う場となっただけでなく、観光客も含めた一般市民も自由に出入りできる日本の大学では類例の少ない施設となった。

そのなかで、展示および資料の公開用に与えられたスペースは、1階正面入ってすぐ右側にある約300m²の部屋であった⁽⁷⁾。立地条件としては、時計台記念館への来館者が最も入りやすい部屋であり、展示にはふさわしいものであると言えることができる。ただ、天井の高さが最大で3m40cm、さらに天井から太い梁が何本も格子状に下がっており、その部分の床からの高さは2m70cmしかなく、展示スペースとしてはいくらか圧迫感を受けるものであった[写真1]。

大学文書館では、議論の末、この部屋を常設展示のスペース(約200m²)、企画展示のスペース(約40m²)、および当館所蔵の一次資料等を閲覧



【写真1】 入口から見た歴史展示室

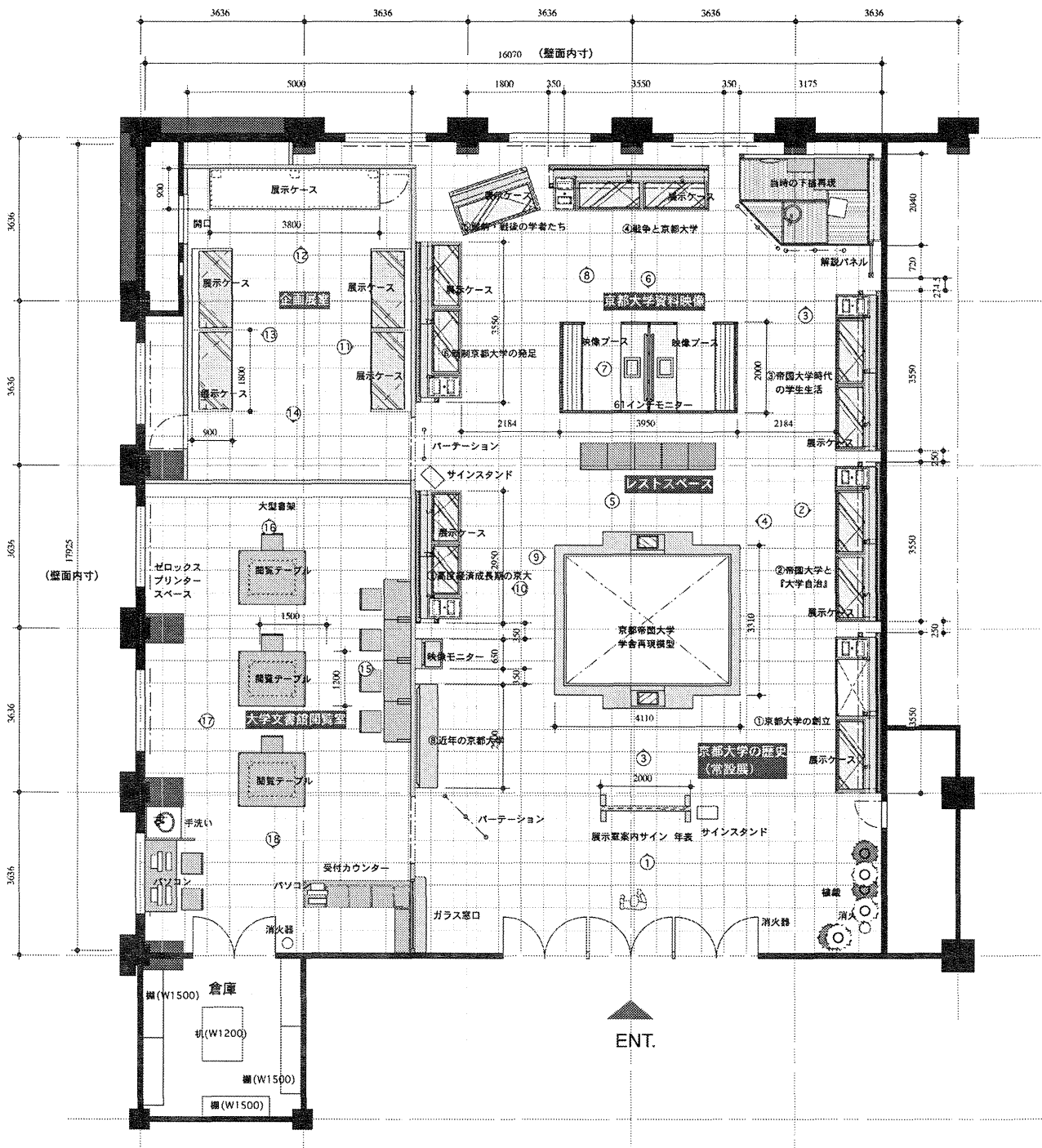
に供する閲覧室（約 60 m²）に分けて使用することにした〔図 1〕。間仕切には高さ約 2 m 20 cm のシステムパネルを設置した。なお、それぞれのスペースの役割については後述する。

また、この部屋は、南辺と東辺に窓が設けられているため、遮光カーテンを取り付けて直射日光を防いだ。

3 基本方針

(1) 目的および対象

既に述べたとおり、時計台記念館の設計当時から京都大学の歴史についての展示を行うという方向性は定まっており、常設展示として通史的に京都大学の歴史を扱うということは、その時からの既定路線といえた。当館作成の総長ヒアリング用



〔図 1〕 歴史展示室・大学文書館閲覧室平面図

の資料には、常設展について「様々な形で京都大学を訪れる来学者、学内の教職員・学生、名誉教授、卒業生等を対象とし、正確な資料にもとづきながら、京都大学の創立以来の歴史と現状および未来について広くアピールする展示とする」とある。特に製作サイドとしては、公的に大学を訪問する人々に、ある程度の時間（20～30分）で京都大学の歴史の概略を理解していただけるような展示を作り上げるというイメージで作業を行った。

同時に、常設展は文字どおり基本的には展示替えを想定していないので、それとは別に、ある特定の出来事、人物、資料といったテーマを立てて企画展を実施する必要があると考えられた。また、所蔵資料を手にとって閲覧する場である閲覧室も同じ部屋の中に設けることで、展示と閲覧を有機的に結合させ、広い意味での資料の公開を行うスペースとして、この300 m²の部屋を位置づけることとした。

(2) 製作上の留意点

製作上の留意点としては、展示一般に適用可能なもの、大学史の展示に関して適用可能なもの、さらに京都大学の歴史展示に限定した場合のものがある上、必ずしも作業の前提として考慮したものばかりではなく、具体的な作業を行っていくうちに必要と感じられた点もあるが、とりあえず列挙すると以下のとおりである。

① 多様な展示方法を心がける。

製作主体が大学文書館であり、所蔵資料を展示の中心に据える関係上、どうしても文書および写真中心の展示になりがちであった。観覧者に興味を持ってもらうためには、いわゆる実物資料の展示が不可欠であることは承知していたが、限られた準備期間の中で収集することも困難であると予想された。そこで、模型およびCGを含む映像を積極的に取り入れ、平板な展示にならないよう努めた。

② 学術研究成果の取り扱い

大学史の展示を行う場合、その大学に所属する研究者による学術研究成果をどのように取り扱うのかということは検討する必要がある。これは展示の製作主体や、当該大学における他の展示施設の有無などとの関係がある問題といえる。結論から言えば、今回の展示では、学術研究成果を積極的に取り上げることはしなかった。京大の場合は、総合博物館という「学術標本資料に関する収蔵、展示、公開及び教育研究の支援を行う」⁽⁸⁾ことを目的とする施設が既にあるということが大きな理由であるし、現実的な理由としてはどの範囲まで取り上げるべきかという議論が大変難しいということもあった。ただし、例外として「西田幾多郎と『京都学派』」および「湯川秀樹」という二つのテーマを設定した。これは来場者を想定したときに最低限必要であろうという範囲として扱うことにしたものである。

③ 「負の側面」の記述

②と同様、大学史の展示を行う場合に考えなければいけないのは、いわゆる戦争協力などの大学の「負の側面」の取り扱いである。特に帝国大学の場合国策への協力というものが設置の前提になっているともいえ、そのような側面をいかに正確に展示していくかということは大きな問題である。今回の展示では、国策協力を目的とした研究機関の設置や、戦意高揚のための学校行事の開催など、機関としての大学が主体的な面も含めて戦争に関わっていった歴史もできるだけ取り上げるように努めた。

④ 学生生活も重視する

学生生活の歴史は、大学史の重要な要素であるにも関わらず、資料の残存状況の問題もあり、正面から取り上げられることは少ない。今回の展示では、「帝国大学時代の学生生活」というコーナーおよびそれと連動した1930年前後の学生の下宿再現模型、さらに戦後から高度成長期の学生生活の移り変わりにも、写真を中心とした資料を使い

ながら一定程度のスペースを割いた。

⑤ 地域との関係をなるべく具体的に取り上げる

俗に大学の街といわれる京都と京大の歴史とはどのように関わっているのか、製作にあたって意識する必要があることは自覚していたが、実際に展示で取り上げるとなると、非常に茫漠としたものになってしまうおそれのあるテーマである。今回の展示では、京大の創立が鴨川東側の文教地区としての発展の核となっていたこと、京大のキャンパスの拡大が周囲の街路や町並み形成に影響を及ぼしたこと、くらいを指摘するに止まった。

⑥ 近年の改革の取り扱い

周知のとおり、1990年代に入って表面化した全国の大学における改革の動きはまだ止まる気配を見せない。京大でも、教養部廃止、新学部・研究科設置、事務組織の改編、法人化等々、近年の改革事項は枚挙にいとまがない。これらの改革を歴史展示の中にどのように位置づけるか、内部でも議論を行った。当初は、いくつかのキーワード（例えば、研究・教育の高度化、大学の開放など）を設定して、個々の事象をあてはめていくことも考えられたが、現在進行中の改革の歴史的評価も定まっておらず、そのようなやり方は困難であるとして、結局最近の約10年は年表形式でいくつかの代表的な事項を紹介するという形をとった。

4 構成

(1) 通史展示

前述のとおり、来学者に京都大学の歴史の概略を理解してもらうということがこの展示の主要な目的であるので、通史展示が中心的な役割を果たすことになった。通史展示は、壁面に沿って創立から近

年の京都大学まで八つのテーマを立て、さらにその下に必要に応じていくつかの小テーマを設定した。一つのテーマにつき展示ケースを1台使用して、それぞれのテーマの独立性を強調した〔写真2〕。素材としては主に大学文書館所蔵の写真、文書資料、実物資料を組み合わせ、それぞれの時代像を表すよう努めた（文書資料についてはすべて複製を作成した）。以下各コーナーについて簡単に紹介する。

① 京都大学の創立

1897（明治30）年の京大創立から、創立時の当初案にあった理工・法・医・文の四つの分科大学が揃う1906年頃までの時期を対象とした。「設置の勅令と初代総長就任」「各分科大学の設置」「創立期の学生たち」の三つの小テーマを設け、特に学生の自主性を重んじた新しい理念を唱えた初代総長木下広次についてや、個性的な教育システムや積極的な人材登用などを実施した各分科大学について展示した。また、「京大とその周辺」という小コーナーを設けて、前述したような京大の創立とその拡大が周辺地域に及ぼした影響について言及した。

なお、このテーマ設定に関連して議論された問



〔写真2〕 展示ケース

題は、通史展示をどこから始めるかということであった。京大の創立は1897年6月に制定公布された勅令第209号によるが、戦前戦中を通じて京大とは密接な関係を持ち、戦後の教育改革において京大に包摂された第三高等学校（三高）は、明治2（1869）年大阪で開講した舎密局にまで歴史を遡ることができる学校であり、その扱いが議論の焦点となった⁹⁾。しかし、この展示においてはあくまで制度としての京大の創立から取り上げるべきであるという考え方から、三高およびその前身校については戦後の三高包摂を扱ったコーナーで言及することとした。

② 帝国大学と「大学自治」

①を引き継ぐ形で1910年代から30年代半ば頃までの大学の組織、制度、運営の変遷を扱った。「制度・組織の拡充」「大学自治」の進展と動揺」の二つの小テーマを設けたことから分かるように、帝国大学としての京大の拡大と、京大で数多く起きた大学自治関連の事件を結び付ける形で展示を展開した。前者においては当時の植民地を含めて京大の施設が拡大している様子を図示したり、総長の前で宣誓簿に一人ずつ署名する大学院入学式の写真によって大学の権威性を表した。後者では、それぞれの事件の概要、背景などに触れるとともに、例えば滝川事件における法学部の分裂を憤る岩波茂雄の書簡を展示して事件の複雑さを理解してもらうよう努めた。

③ 帝国大学時代の学生生活

②とほぼ同じ時期の学生生活を対象とした。「勉強」「スポーツと文化活動」「日常生活」の三つの小テーマを設け、大学という限られた空間のなかではあるが、学生たちが大正デモクラシーといわれる民主主義的な風潮のもと、自由を享受し、様々な活動を行っていたことをなるべく多様な写真、資料を用いて展示した。

④ 戦争と京都大学

1930年代半ばから1945年の敗戦までの時期を

対象とした。戦争と大学の関係は、学問・思想への弾圧や「学徒出陣」といったいわば被害の側面だけでなく、研究教育面での国策への協力という側面もあって単純な問題ではない。この展示では、「研究活動」「儀式と行事」「戦時下の学生」という三つの小テーマを設け、前二者では理工系を中心とした研究所・学科の新設、中国大陆や「南方」についての研究、さらに戦意高揚や一体感の強化を目的とした諸行事の開催などを取り上げた。さらに学生関係では、できるだけ当時の学生たちの意識に迫るため、特攻死した京大出身の学徒兵の家族宛書簡、敗戦前後の寄宿舎日誌なども展示した。

⑤ 戦前・戦後の学者たち

前述のように今回の展示では京大における学術研究成果の紹介として「西田幾多郎と『京都学派』」と「湯川秀樹」を取り上げた。前者では西田・田辺元を中心とした哲学科の教授たちの研究活動を、初公開の書簡などを織り交ぜながら展示し、後者では湯川と近い関係にあった朝永振一郎にも言及し、主に京大の基礎物理学研究所所蔵の原稿や書簡を使いながらその業績を示した。

⑥ 新制京都大学の発足

1945年の敗戦から1950年代前半頃までのいわゆる教育改革の時期を対象とした。「敗戦直後の動き」「新制大学の設置」という二つの小テーマを設け、適格審査に代表される敗戦直後の混乱、教育学部や分校といった新しい組織の発足などを示し、卒業証書・入学通知など当時の学生関係の資料も展示した。また、「三高の歴史」というテーマも別途設け、戦後の教育改革で京大と合同した三高の歴史についても簡単に紹介した。

⑦ 高度経済成長期の京大

1950年代半ばから1970年代までを対象とした。「理工系学部を中心とする拡大」「変わりゆく学生生活」「戦後の学生運動」の三つの小テーマを設定し、この時期の大学の拡充を写真やグラフで

示し、1950年代から現在までの学生生活の変貌ぶりを写真で対照させることで表した。学生運動については1950年代前半、60年安保闘争、そして大学紛争という三段階でとらえて、それぞれ写真を示した。特に大学紛争については1969年3月の入試の学外における実施から同年9月の時計台封鎖解除まで、当時のニュース映像を編集して展示した。

⑧ 近年の京都大学

前述のように、1990年代以降の京大における様々な改革を、年表に適宜写真を付す形で紹介した。

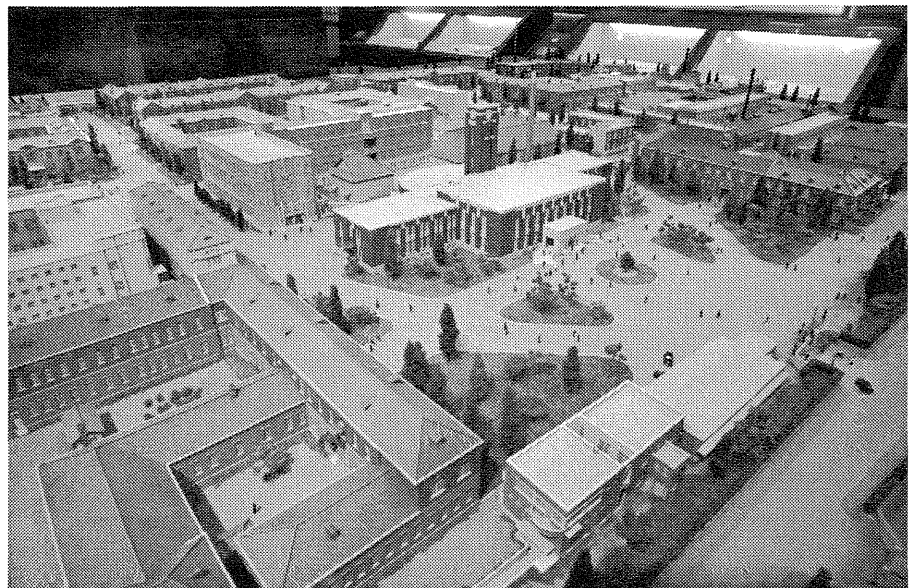
(2) 本部構内再現模型

観覧者にキャンパスの歴史を実感してもらうために、1939年の本部構内を150分の1の模型で再現した〔写真3〕。1939年を選んだのは、この時期以後戦争が進むにつれ、例えば煉瓦造りの1階に木造の2階を接合させるなど付け焼き刃的な建物が増えるということがあり、結果的にはあるがこの時期が戦前期の京大キャンパスの完成期であったからである。装飾性豊かな建物が多く、またキャンパスプランも分かりやすいもので、大学のキャンパスのあり方を考えるきっかけにもなりうるものでもある。製作のための資料として主に使用したのは、施設部所蔵の図面と大学文書館所蔵の写真であった。いずれも比較的豊富に残されていたが、なかなか明らかに出来なかったのが建物の

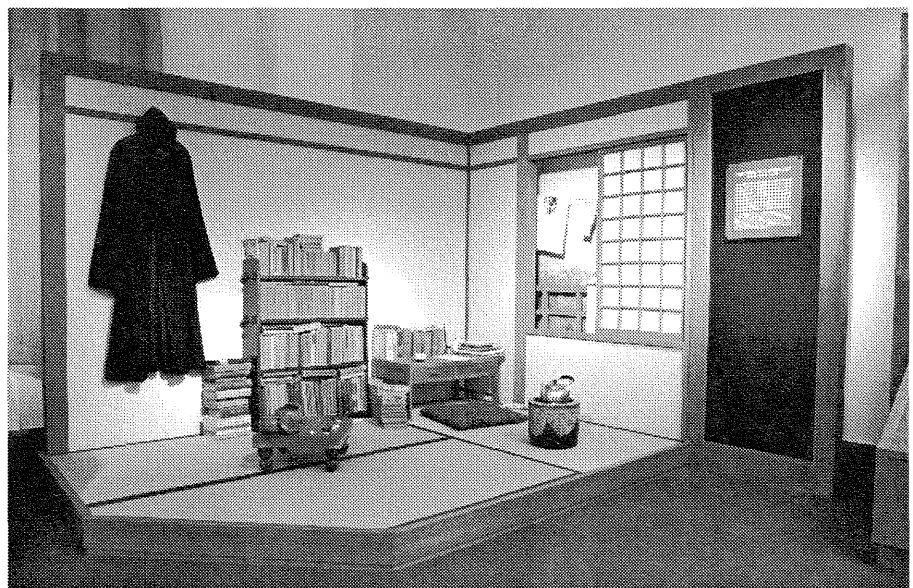
色であった。図面には色合いについての記載はないので、現存している建物の色や僅かな文献資料を手がかりになるべく正確に再現できるよう努めた。

(3) 下宿再現模型

戦前期の学生生活を示す実物大の模型を設置した〔写真4〕。設定は1930年代前半、経済学部生でその直前に教授を辞した河上肇に憧れて京大に入学した学生の下宿とした。哲学・経済学を中心とした書籍、基盤、火鉢、机、文房具等可能な限



〔写真3〕 本部構内再現模型



〔写真4〕 下宿再現模型

り時代考証を行い、当時の学生の姿をリアルに再現するよう努めた。

(4) CG 映像

展示室に2台設置された映像ブースで流す映像として、京大の学術情報メディアセンターコンテンツ作成室と共同で、「創立期の京都大学 一学生たちの一日」という10分程度のCG映像を製作した。これは、1909年頃の京大のある一日を学生の目線で、朝の通学風景、大教室での授業、実習、図書館、寄宿舍等々の状況を資料に基づいて再現したものである。CGならではの臨場感を伴って、当時の大学の様子を見ることができる。なお、この映像の公開は2005年4月からの予定である。

なお、映像ブースでは他に京大創立百周年記念映画「京都大学の百年」も観ることができる。

5 観覧者の反応

展示の入場者数を本格的にカウントし始めたのは2004年4月からであり⁽¹⁰⁾、同年12月までの数値を表に示した(月曜日は休館日)。場所が京大のシンボリック建物である時計台記念館で、しかも入場無料ということもあり、多くの方が観覧されている。大学で何らかの行事があるとき(オープンキャンパスなど)や春秋の観光シーズンの入場者数が特に多くなっている。一般的に土日の入場者が多いのも、京都への観光客や学会関係者が時計

〔表1〕「歴史展示室」の入場者数

4月		5月		6月		7月		8月		9月		
4/1 (木)	133	5/1 (土)	188	6/1 (火)	128	7/1 (木)	74	8/1 (日)	128	9/1 (水)	50	
4/2 (金)	140	5/2 (日)	350	6/2 (水)	57	7/2 (金)	125	8/3 (火)	143	9/2 (木)	63	
4/3 (土)	203	5/4 (火)	145	6/3 (木)	85	7/3 (土)	104	8/4 (水)	79	9/3 (金)	82	
4/4 (日)	200	5/5 (水)	143	6/4 (金)	72	7/4 (日)	92	8/5 (木)	111	9/4 (土)	101	
4/6 (火)	102	5/6 (木)	72	6/5 (土)	115	7/6 (火)	72	8/6 (金)	155	9/5 (日)	87	
4/7 (水)	375	5/7 (金)	144	6/6 (日)	105	7/7 (水)	69	8/7 (土)	161	9/7 (火)	56	
4/8 (木)	94	5/8 (土)	174	6/8 (火)	93	7/8 (木)	70	8/8 (日)	137	9/8 (水)	103	
4/9 (金)	152	5/9 (日)	115	6/9 (水)	114	7/9 (金)	109	8/10 (火)	136	9/9 (木)	102	
4/10 (土)	221	5/11 (火)	69	6/10 (木)	51	7/10 (土)	111	8/11 (水)	136	9/10 (金)	108	
4/11 (日)	127	5/12 (水)	107	6/11 (金)	49	7/11 (日)	93	8/12 (木)	144	9/11 (土)	105	
4/13 (火)	87	5/13 (木)	86	6/12 (土)	112	7/13 (火)	67	8/13 (金)	206	9/12 (日)	86	
4/14 (水)	68	5/14 (金)	57	6/13 (日)	157	7/14 (水)	68	8/14 (土)	166	9/14 (火)	73	
4/15 (木)	88	5/15 (土)	182	6/15 (火)	141	7/15 (木)	74	8/15 (日)	181	9/15 (水)	106	
4/16 (金)	57	5/16 (日)	63	6/16 (水)	79	7/16 (金)	89	8/19 (木)	75	9/16 (木)	112	
4/17 (土)	123	5/18 (火)	88	6/17 (木)	67	7/17 (土)	264	8/20 (金)	85	9/17 (金)	113	
4/18 (日)	191	5/19 (水)	74	6/18 (金)	62	7/18 (日)	151	8/21 (土)	116	9/18 (土)	96	
4/20 (火)	53	5/20 (木)	51	6/19 (土)	165	7/20 (火)	59	8/22 (日)	136	9/19 (日)	113	
4/21 (水)	44	5/21 (金)	78	6/20 (日)	98	7/21 (水)	88	8/24 (火)	72	9/21 (火)	74	
4/22 (木)	79	5/22 (土)	143	6/21 (月)	22	7/22 (木)	88	8/25 (水)	100	9/22 (水)	75	
4/23 (金)	102	5/23 (日)	65	6/22 (火)	88	7/23 (金)	73	8/26 (木)	89	9/23 (木)	98	
4/24 (土)	206	5/25 (火)	82	6/23 (水)	105	7/24 (土)	251	8/27 (金)	120	9/24 (金)	143	
4/25 (日)	129	5/26 (水)	82	6/24 (木)	72	7/25 (日)	61	8/28 (土)	145	9/25 (土)	252	
4/27 (火)	27	5/27 (木)	49	6/25 (金)	101	7/27 (火)	133	8/29 (日)	118	9/26 (日)	107	
4/28 (水)	112	5/28 (金)	109	6/26 (土)	98	7/28 (水)	122	8/31 (火)	59	9/28 (火)	71	
4/29 (木)	127	5/29 (土)	298	6/27 (日)	84	7/29 (木)	89	計	2998	9/29 (水)	52	
4/30 (金)	86	5/30 (日)	246	6/29 (火)	50	7/30 (金)	89	※オープンキャンパス		9/30 (木)	55	
計	3326	計	3260	6/30 (水)	90	7/31 (土)	74	8/17 (火)	1081	計	2483	
				計	2460	計		2759	8/18 (水)	920		
									計	2001		

10月		11月		12月		1月		2月			
10/1 (金)	73	11/2 (火)	71	12/1 (水)	76	1/4 (火)	82	2/1 (火)	44		
10/2 (土)	117	11/3 (水)	128	12/2 (木)	99	1/5 (水)	32	2/2 (水)	52		
10/3 (日)	60	11/4 (木)	76	12/3 (金)	83	1/6 (木)	103	2/3 (木)	228		
10/5 (火)	82	11/5 (金)	39	12/4 (土)	74	1/7 (金)	63	2/4 (金)	93		
10/6 (水)	165	11/6 (土)	117	12/5 (日)	127	1/8 (土)	62	2/5 (土)	117		
10/7 (木)	150	11/7 (日)	120	12/7 (火)	79	1/9 (日)		2/6 (日)	75		
10/8 (金)	107	11/9 (火)	184	12/8 (水)	74	1/11 (火)	38	2/8 (火)	28		
10/9 (土)	86	11/10 (水)	85	12/9 (木)	63	1/12 (水)	62	2/9 (水)	65		
10/10 (日)	121	11/11 (木)	58	12/10 (金)	111	1/13 (木)	45	2/10 (木)	52		
10/12 (火)	84	11/12 (金)	62	12/11 (土)	81	1/14 (金)	60	2/11 (金)	172		
10/13 (水)	113	11/13 (土)	111	12/12 (日)	128	1/15 (土)	72	2/12 (土)	68		
10/14 (木)	105	11/14 (日)	124	12/14 (火)	64	1/16 (日)	46	2/13 (日)	70		
10/15 (金)	118	11/16 (火)	56	12/15 (水)	58	1/18 (火)	66	2/15 (火)	182		
10/16 (土)	97	11/17 (水)	65	12/16 (木)	58	1/19 (水)	109	2/16 (水)	83		
10/17 (日)	98	11/18 (木)	226	12/17 (金)	111	1/20 (木)	62	2/17 (木)	65		
10/19 (火)	303	11/19 (金)	143	12/18 (土)	101	1/21 (金)	99	2/18 (金)	47		
10/20 (水)	27	11/20 (土)	394	12/19 (日)	203	1/22 (土)	64	2/19 (土)	88		
10/21 (木)	81	11/21 (日)	858	12/21 (火)	48	1/23 (日)	79	2/20 (日)	67		
10/22 (金)	219	11/23 (火)	437	12/22 (水)	56	1/25 (火)	71	2/22 (火)	68		
10/23 (土)	124	11/24 (水)	82	12/23 (木)	77	1/26 (水)	41	2/23 (水)	61		
10/24 (日)	128	11/25 (木)	103	12/24 (金)	46	1/27 (木)	98	2/24 (木)	88		
10/26 (火)	62	11/26 (金)	120	12/25 (土)	72	1/28 (金)	44	2/25 (金)	98		
10/27 (水)	61	11/27 (土)	189	12/26 (日)	70	1/29 (土)	43	2/26 (土)	197		
10/28 (木)	78	11/28 (日)	135	計	1959	1/30 (日)	70	2/27 (日)	63		
10/29 (金)	341	11/30 (火)	118			計	1511	計	2171		
10/30 (土)	102	計	4101								
10/31 (日)	147										
計	3249										

※ 6 月 21 (月) は臨時開館

※ 6月21(月)は臨時開館

台を訪れ、その流れで展示を見ていくという傾向があるからと思われる。

観覧者を対象にアンケート用紙を置いている。記入してくれる人は観覧者数に比べて決して多くはないが、例えば「展示品でいちばん印象に残ったものは何ですか」という設問に対するここ数ヶ月（2004年9～12月）の回答を列記すると以下のようになる。

- ・生まれないときの歴史（卒業生以外、60歳）
- ・映画40分もの（卒業生以外、60歳）
- ・戦前の大学自治をあつかったコーナー（卒業生、69歳）
- ・大学紛争のビデオ（卒業生、50代）
- ・湯川先生に関すること（卒業生以外、75歳）
- ・学生紛争のビデオ（卒業生以外、32歳）
- ・模型や下宿の再現（卒業生以外、43歳）
- ・講義ノート、卒業論文、下宿の再現など学生生活を実感できるもの（卒業生以外、51歳）
- ・学生紛争時のビデオ、展示物（卒業生、37歳）
- ・紛争（10歳）
- ・京大の模型（卒業生、67歳）
- ・毛筆で書かれた賞状、歴代の先生方の業績等々（卒業生以外、73歳）
- ・学生運動の頃（卒業生、35歳）
- ・京大の歴史をたどったビデオ（卒業生以外、48歳）
- ・湯川・朝永両先生の温容とその事績（卒業生、85歳）
- ・大学構内の模型（卒業生以外、39歳）
- ・帝国大学時代の学生生活（卒業生以外、29歳）
- ・湯川博士などの肉筆（卒業生以外、62歳）
- ・模型（16歳）
- ・京大の模型（16歳）
- ・岩波茂雄氏より佐々木教授への手紙、学生時代の下宿の様子、並べてある本棚の本（卒業生、78歳）
- ・創立期の史料（卒業生、37歳）

- ・京都大学の創立、戦前戦後の学者たち（9歳）
- ・初期創設期の文書（67歳）
- ・下宿の様子（8歳）

6 今後の課題

今後の課題として挙げられることの第一は、展示に関するより深い説明の必要性である。展示ケース、パネルというスペースではこちらから伝えられる情報量は限定されてしまう。そういった状況を補完する役割を果たすのが、一つは図録であろう。展示内容について、深く知りたいという観覧者の要求に応えるためには、図録の作成は不可欠と思われる。また、図録以外にも、例えばテーマごとにA4判1枚程度の補足説明資料を置いておくということも考えられよう。そして、その際には英文の説明ももっと充実される必要があるだろう。現在はテーマの説明文および展示品のタイトルには英訳文を付しているが、小テーマの説明文や、展示品についての具体的な説明文は和文のみとなっている。外国人の来学者が多数あることを考えると、当然そういった配慮は必要であろう。

第二は、宣伝体制の問題である。前述のアンケートで「この展示を何でお知りになりましたか」という設問に対していちばん多い回答は「時計台記念館に来て初めて知った」というものである。つまり多くの観覧者は展示を見に来たというよりは、時計台記念館に来てみたらたまたま歴史展示があったので寄ってみたということなのである。ホームページや、チラシを使った関係機関等への周知は行っているが、宣伝のあり方は今後さらに検討していく必要があるだろう。

いずれにしても、開館して1年余り経ち、新たに見えてきたことも多い。常設展示に関しては、当面展示替えを行う予定はないが、同じ場所で開催している企画展を通して、京都大学における歴史展示、「大学アーカイヴズ」としての展示活動について実践経験を積みながら考えていきたい。

〔註〕

- (1) このアンケートは、大学の資料保存・年史編集機関の全国組織である全国大学史資料協議会が同会の会員校を対象に行ったもので、各機関の組織、施設、所蔵資料、活動等包括的に実態を調査した。展示活動についての設問には59校からの回答があった。その内訳は以下のとおり(重複回答があるため、合計は59にはならない)。

	私立	国立
常設展を開催している	17	2
定期的に企画展を開催している	14	0
不定期に企画展を開催している	14	4
開催していない	12	2

母数が59という決して多くない数ではあるが、それでも展示が「大学アーカイヴズ」の重要な業務となっていることは読み取れるであろう。また、同アンケートでは展示のテーマについても質問している。大部になるためここでは省略するが、多くの学校が通史的展示を行っているとは回答している。

- (2) 折田悦郎「国立大学アーカイブ私論」『大学アーカイヴズ機能についての基礎的研究 ―「大学改革」との関連において―』平成14-15年度科学研究費補助金(基盤研究(BX2))研究成果報告書(研究代表者 新谷恭明)、2004年、10ページ。
- (3) 大学ということを離れた文書館相当施設一般における展示論は、それなりの蓄積を持つようになってきている。目についたものだけでも、中野等「文書館(史料館)における「展示」業務」『記録と史料』第2号、1991年、森本祥子「アーキビストの専門性 ―普及活動の視点から―」『史料館研究紀要』(国文学研究資料館史料館)第27号、1996年、柴田知彰「記録史料の展示に関する一考察」『秋田県公文書館研究紀要』第3号、1997年、鹿毛敏夫「文書館展示のアイデンティティ ―記録史料

展示の理論と実践―」『史料館研究紀要』(大分県立先哲史料館)第6号、2001年、豊川公裕「文書館展示のあり方 ―千葉県文書館企画展を例に―」

『千葉県の文書館』第9号、2004年、などが挙げられる。自治体等の機関と「大学アーカイヴズ」とでは展示に求められる内容に違いがあると筆者は考えているが、それでもこれらの実践例や理論は参考になることが多いであろう。

- (4) 井村裕夫「京都大学創立百周年記念事業について」『京大広報』号外、1994年6月21日。
- (5) 1994年3月、学内の記念事業委員会で決定された「京都大学百周年時計台記念館構想」には「京都帝国大学設立以来百年の歴史と伝統を評価し、その成果の一般公開を図る目的で関連資料および学術発展の歴史を展示する」とある。財団法人京都大学後援会『京都大学創立百周年記念事業募金報告書』1999年、29ページを参照。添付されている平面図によると、展示ホールの位置は現在のものとは異なるが、面積としてはほぼ同規模、2階まで吹き抜けの形で構想されていたようである。
- (6) 製作にあたっては、内田洋行株式会社と契約を結んだ。
- (7) 他にこの部屋に隣接して13m²のスペースがあった。これは、倉庫として利用している。
- (8) 「京都大学総合博物館規程」(2004年4月1日全部改正)第2条。
- (9) 京大で近年発行されている沿革史においては、京大創立までの第三高等学校およびその前身校の歴史を前史として記述している。例えば、京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』総説編、1998年、では「創立前史」として100ページ以上を割いている。
- (10) 職員が閲覧対応も兼ねて展示室に常駐しているので、手動のカウンターで入場者を数えている。